

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.84

試 行 錯 誤



特集 カンプチア自動車事情

カンプチア自動車事情	2
「ノープロブレム」はプロブレム?	5
訓練生たちを応援して下さい	6
変わりゆくカンプチア	8
いんたびゅう 自動車労連 足立房夫さん	10
『カンプチアに関するNGOフォーラム』	12
シリーズ NGOを見直す	16
My Dear Friend 生徒に向けての帰国報告	17
JVCNEWS	18
ボランティア登場7	20

カンプチア自動車事情

カンプチア代表 熊岡路矢

道路事情

1950年代、60年代のカンプチア(カンボジア王国—シハヌーク時代)の国力は、たとえば隣国タイ王国と比べ、農産物の生産、工業は人口差を考えれば遜色のないものでした。教育分野など学校数、識字率等上回っている部分もありました。その発展は、御存知のように1970年代のロンノル・クーデター、「ポルポト」革命などによって、停止したというより一気に数十年分昔へ戻されてしまいました。

すでにシハヌーク時代に一部外国の援助も取入れて、空港、港(シハヌーク・ヴィル)、鉄道(首都からバットアンバン—バンコクまでとタケオ—シハヌーク・ヴィルまでの2線)が整備されていました。道路はサイゴン市(現ホーチミン市)にいたる1号線、シハヌーク・ヴィルまでの高速4号線、トンレ・サップ湖をはさみバットアンバン市へ向かう5号線と6号線などの道路網が全国を結んでいました。本線は舗装され、地方の道路も土が固められ、あるいは小石などを地表にまぶして、まあ車輛が走れる状態ではあったようです。

1979年、「ポルポト」体制の崩壊後、ユニセフ、国際赤十字や欧米民間団体による緊急救援活動が始められましたが、当時飢餓の危険にあったカンプチア国民への食糧輸送は、ズタズタ、ガタガタの最悪の道路事情と車輛の不足により、とても難しいものでした。そのころ食糧輸送に使えるトラックは2ケタしかなく、状態もひどいものでした。そのためユニセフは輸送用のトラックの購入から始めざるをえず、500台以上の貨物車がカンプチア(ヘン・サムリン政権)の赤十字、運輸省、農業省、保健省などに分配されました。1980年の事です。

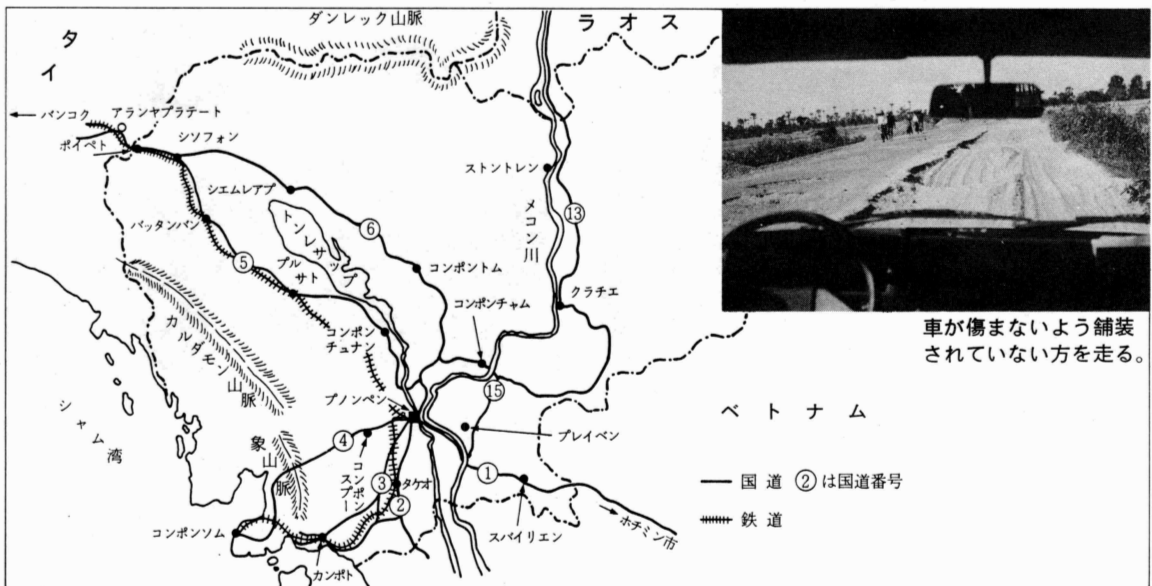
その後ベトナム軍がカンプチアにいるという理由により、ベトナム以上にカンプチアが罰せられるという事態が続き、今日まで国連の開発援助と西側諸政府による二国間援助は行われていません。

国道でも道路状態がまともなのは、プノンペンからコンボンソム(旧シハヌーク・ヴィル港と市)への4号線と、同じくネアク・ルアン(メコン河の渡し)を経てホーチミンへ続く1号線だけです。物資移動の幹線道路は大事にされているとはいえ、片道1車線が必要最少限しかありません。ほかの道路は舗装が途中でとぎれ、穴ボコ道を時速5~10キロで乗り越えていくので車も乗員も消耗が激しく、気分の悪くなる人、頭を車の天井にぶつける人もです。国道でさえこんな風ですから一般道路は全行程10キロ以下でしか走ることができず、2台目以降の車は距離をとらないと赤土のホコリで前方もよく見えません。

ほとんどの車は「オシャカ」寸前

私たちのカウンターパートの自動車輸送公社には、8年前にユニセフやOXFAMから寄附された輸送車輛の大部分が集まっていますが、250台以上がすでに壊れて「車の墓場」で解体され、200台以上が動けないまま「長期療養ベッド」で休んでいる状態です。動いている200数十台も日本の安全基準からいえば、外の道を走ってはいけないものばかりです。私は以前民間の車検場で働いていましたが、そのころの基準で検査すればほぼ全部「アウト」です。エンジンがだめなものはある意味で安全です。動けないから。一番怖いのは、エンジンが動いてブレーキ装置やサスペンション(けん架装置)が壊れているものです。事実止まりたい所で止まらない事や、走行中板バネが折れてコントロールがきかず、荷物・乗員ともに田んぼへ突込んだケースなど少なからずあります。

こういうトラックで必要物資を運んでいる運転手さんには「本当に御苦労さま」という気持ちになるのですが、彼らにはもう1つの危険があって、ゲリラか山賊の待ち伏せで大破したトラック、そして殺



傷された運転手のケースもありました。

さて、民生に欠かせない物資輸送や援助米の配布に使われるこれらの車輛のうち、ソ連や東欧製のものについては専門の修理工場があるようですが、英国、日本など西側製の車輛に関しては、長い間修理のための設備もありませんでした。83年、85年と2度カンブチア国内を視察した時には、炎天下あるいは雨の中、メカニックの人々は草や土の上に石を積んで車輛の下を支え、タイヤや板バネをはずして修理をしていました。

さきほど述べたような悪条件のもとで、またユニセフから供給されていた修理部品も1～2年で途絶えてしまいました。そこで数少ないカンブチアの腕の良い職人さんたちは中古部品を再生し、身の回りにある木や針金など限られた材料を巧みに活用しています。いわば「だまし、だまし」車を生かしてきましたわけです。また一方いろいろ欠点のある危ない車を運転手さんたちは、上手に乗りこなしてきたようです。

修理する方と運転する方のアクロバティックな努力も、限界を越して「オシャカ」になる車がぞろぞろ出始めたころ、ようやく私たちの技術学校の建物と設備ができたわけです。民間団体が手を出すにはお金もかかり、大がかりすぎるプログラムだったかもしれません。しかしこの数年間はどこからの応援も期待できなかったのですから、悪条件の下で働いていたタック・アンさんやアム・ディエンさんなど技術者や職人さん、運転手さんは喜んだのではないのでしょうか。

技術学校の開校

87年7月に建物が完成し、熱い日光や風雨をさえぎり、ぬかるみを防ぐ屋根、壁、床ができただけでも修理作業は格段に安全になり、作業はやりやすくなりました。そして88年1月から約20名の私たちのスタッフ兼訓練生を中心に55名の訓練生を受け入れ、技術の理論講習とエンジンなどの分解組立て訓練が始まりました。このささやかなスタートまでに、86年の準備段階からなんと2年間も経っていました（言葉ではこのように数行とか1段落で済んでしまうのですが、ここに至るまでには技術者兼工事監督の簗田さん、溶接や塗装も含めた技術指導に当たった馬さん、それから時にはわけのわからない事を言う我々外国人を受け入れ、辛抱強く付合ってくれたタック・カンさんなどの受け入れ側、ひどい時は昼夜兼行で建築工事に取り組んだ大工さんなど、今となっては懐しい部分もあるけれど、それぞれに苦勞をしてきました）。

6月半ばごろから、JVC東京事務所が「この1年間に集まるはずのお金をあてにして」注文してくれた修理部品がシンガポール経由でプノンペンに届くようになりました。3台のエンジン分と10台のシャシ（車体）分が届き、初めてごまかしで無く本格的に直せるようになりました。

8月末、2つの孤児院からひとりずつ訓練生が加わりました。孤児院を管轄している社会福祉省からは、各地方の合計16の孤児院から各1名合計16名の孤児を受け入れてくれという要請もありましたが、保健省、教育省、農業省、赤十字の各分野からも訓

野ざらしになったままのトラック、
向こうに見えるのが技術学校



練生受け入れを要請されており、今回はこの2名を試験ケースとしました。彼らについては本人の希望も含め、技術の向上やチームで働くための条件が揃えば、1～2年理論と実践の訓練を受け、できればそのまま私たちのスタッフ（JVCが「雇う」ということができないので、自動車公社の職員）になってもらいたいと長期的に考えています。

現状での問題点

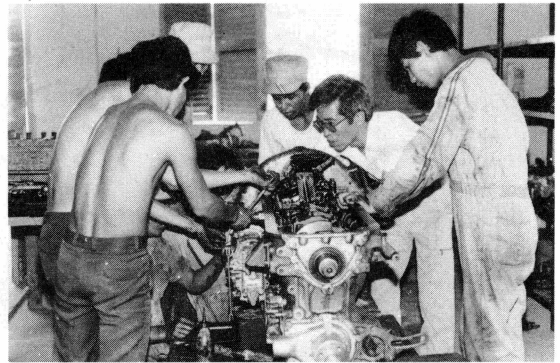
基礎的な作業が安全にできるようになり、自動車や機械を修理する際の訓練を実施できる態勢もできました。これにより最初の目標の2段階（建物設備のハード面とスタッフ要請のための組織面）は達成できましたが、まだ不十分な点が当然いくつかあるので書いてみます。

① 公共の電気供給が不安定でしばしば停電になるので作業を支える発電機が、また部品を作製・再生するための旋盤が必要である。大型車はすべてディーゼル車なので、ゆくゆく噴射ポンプ・テスターが必要である。

② 現在動いているものも含め、すべての輸送用車輛の損傷があまりに深く、今後も安定した修理部品の供給が必要である。しかしJVCだけでは1年間にエンジン10台、車体10台ぐらいしか直せない。また技能訓練の意味でも古い壊れている機械を（直すつもりでなく）ただ分解・組立てしていても実力がつかない。

③ すべての分野にも言えるのだが、カンブチア側の機械技術訓練できる人材があまりに少ない。あまりに不十分なので、他の民間団体、国連、政府援助による同様のプログラムの開始と外国におけるカンブチア人訓練生の受け入れを期待したい。現在すでにフィリピン（農業＝米作）、インド（農業、英語）、フランス（保健医療）、オーストラリア（芸術・文化）が訓練生をすでに受け入れている。

6気筒エンジンの修理。“走れる”トラック
は少ないので、みんな真剣だ



④ JVCのプログラムの中核である指導員の派遣、及び部品の調達を恒常的に成立させるために、年間2500万円以上の活動資金が安定して必要である。

⑤ カンプチア人スタッフ、訓練生から英語や日本語を学びたいという要望がある。（特に英語は今後ますます必要になる）一方我々外国人メンバーは、英語の能力向上はもちろん、クメール語と基礎的なフランス語を修得する必要がある。あるいはこれを制度的に保障していくことも考えられる。

今後の展望や希望として

なんといってもカンブチアの人々の困難を大わくとして解決するには、7月に行われた「ジャカルタ非公式会談」のような国民和解と平和への話し合いが進むことであり、「カンブチア問題」が国内的国際的に解決することです。

私たちのプログラムに抱えている上記の②や③の問題は、カンブチアの国と人々が国連や国際社会の中で当たり前のポジションを取りもどせば、平行して解決されていく問題かもしれません。その時私たちは、本来多くの民間の救援・開発協力団体が志している人間の交流、人材育成の交換という分野にたち戻ってこのプログラムに関していけるでしょう。

さらにこの確立した足場である、ワークショップ＝技術学校（プノンベン）をベースにして農村地域へ足を伸ばし、井戸掘り、かんがい、母子保健とも関係しながら、今後最も興味深く大事な分野になっていく「適正技術」について学び、これを育てたいと思います。

農業専門家などカンブチアの人たち自身が、豊かな日の光、水、風、メコンやトンレ・サップの河の流れを利用して、「汚れ」の少ない農業かんがい技術の開発を志しています。平和で豊かなゆったりしたカンブチアとして、この国の人たちが笑顔で再出発できる日も1～2年以内に近づいてきたようです。

「ノープロブレム」はプロブレム？

熊岡路矢

私達日本人メンバーのクメール語や英語の発音が悪いのか、カンプチアで働いていて、うまく意思が通じないことがある。一緒に働いている運転手さん（現地では西側外国人には運転免許が与えられず、原則として私達外国人は車を運転できない）に行く先を伝えて、「OK!」とか「ノー・プロブレム＝問題なし、『私に任せなさい!』」という返事が返ってくるのだが、しばらくして別の方向へ走っていたり、目的地を通り越していたりすることが時々ある。私達の説明不足であったり、不正確な発音が原因であったりする場合は反省し赤面するしかないのだが、相手の早呑込みや思い込みによる誤解のこともある。

車や機械類の修理でも同じようなことが起こることがある。簗田さんや馬さんが、「これはこの様に分解して下さい、あるいは組立てて下さい」と言って、「了解!」、「ノー・プロブレム!」が返ってくる。しかし、後で見にきてみると事態はその様に進行していない。ガクッと来る瞬間である。取返しのつく、つまり簡単に修復できるものならよいのだが、短く切りすぎていたり、もとに戻すには新品の部品やパッキングが犠牲になってしまうこともある。

前記の「行く先」の件と同様、こちら側の発音や説明の不都合、あるいはメカニックや訓練生の方の早呑込みに起因する他に、（大袈裟に言えば、文化の違いということにもなるが）考える際の概念の違いというか、基準の違いによる相互の理解の困難がある。

例えば、クメール語には、「直す」とか「修理する」という言葉はあるが、「保守維持する＝メンテナンス」という言葉が無いようである。もしくはそういう考え方が弱いようである。健康に関して「治療」と「予防」が、二つの異なるしかし両方大事な考え方として有るように、機械ものの場合壊れた時の「直す」と壊れる前の「整備」とか「定期点検」の考え方、チェックの仕方を私達日本のメカニックは仕込まれる。しかし、カンプチアでは、たとえば車は、動かなくなった時に初めて手をかけ、「修理しましょう」ということに

なる。

また同じようにエンジンやブレーキを直しても、より良い、より安全な、より長持ちする、より（仕上がり）美しいやり方があるって、私達は多くは実施のなかでこれを学んで身につけていく。カンプチアでは長い間、純正の部品も適切な設備や工具も無く、またボルボ時代を通じて技術と技術者の抹殺があったため、無理からぬ理由もあるのだが、各自が中途半端な「我流」のやり方にこだわったり、自己満足したりしていたりする。したがって機械なら「動けばいいんでしょ」、車なら「走ればいいんでしょ」という極めて即物的な低い作業目標と方法になってしまう。

このあたりが、カンプチアの指導員も巻込んで、私達の技能訓練の目標になるのだが、逆にカンプチアの技術者は限られた工具、材料と中古部品を上手に使い、思いがけず鮮やかな直し方を見せていることがある。壊れた板バネ・けん架装置を溶接して再使用したり、金属当て板の摩耗した側をひっくり返して2度使ったり、鉄製の部品がないので木で同じ型の部品を作って差替えたり、いずれも日本では危険なため絶対にしないが、カンプチアでは車が高速で走れる道路が殆どないので、まあようやくもっているようだ。



訓練生たちを応援して下さい

私たちと働くカンプチアの26名のスタッフのうち19名は、エンジン、機械、溶接、電気、板金、塗装などについて学ぶ訓練生でもあります。他の7名は教える側に2名、部品・工具管理、工程管理、財務会計に5名です。

それではこの19名のなかからB班の7名について紹介してみたいと思います。このグループはエンジンと車体の分解組立てを学びながら実施しています。

ボル・ヴァニーさん (21)

年齢は若いけれど自動車修理のしごとがある程度分かっている。年上のメンバーもいるが、彼がこのチームのリーダーになった。約3年間古い工場でメカニック見習いの経験があり、JVCの活動に加わって1年が過ぎる。父親は自動車輸送公社の運転手であったが、1985年コンボン・ソム付近でゲリラに攻撃され死亡した。現在7人兄弟の頭として家族の生活を支えている。

チャン・ソンボンさん (26)

9年間の機械しごとの経験があり、一通りのことはできるが、体が弱く休みがちである。来た時は明るくよく働く。パン・チャンさんの息子。

タン・ブンナさん (19)

学校を卒業しJVCのプログラムに参加した。まだしごとはほとんどできない。人が良く時間も守る。JVCのカウンター・パートである自動車輸送公社のタック・カン氏の夫人の甥にあたる。

シアン・ティアンさん (37)

1986年まで公社の駐車場ガードマンであった。JVCプログラムには建設の段階から参加し、昨年7月15日の完工式以後は、メカニック見習い=訓練生となった。既婚で子供も4人いる。メカニックの仕事が好きでまじめによく働く。

ケオ・トゥイさん (36)

古い工場で1年、JVCで1年メカニック見習いとして働いている。それ以前の機械修理経験もあるとのこと。しごと上手で人望もある。子供が1人いる。父親は1976年に亡くなった。

ボル・ソヘンさん (21)

採用外であったが、メカニックが好きで参加して



メカニックB班とスタッフ

左から馬さん、ボル・ヴァニーさん、
チャン・ソンボンさん、タン・ブンナさん
パン・チャンさん、簗田さん

きた。しかし無給ということもあって工場に来ないこともある。(外でお金を稼ぐ必要がある)

ナイ・ソクサンパーさん (22)

肺と肝臓の病気のため、カンプチア/ソ連友好病院(シハヌーク時代に創設)で長期療養中。父親は公社の運転手である。

教える側の2人についても紹介しましょう。

アム・ディエンさん (40)

現在事実上の工場長格である。シハヌーク時代(1970年まで)にルセイ・ケオ職業訓練学校で自動車修理技術を学んだ。タック・カン氏は先輩にあたる。1979年以来公社の技術スタッフとして働いている。妻、子ども5人と自分の母親と暮らしている。非常にまじめな人で、作業、部品、工具の管理もきちんとしている。理論は教えていない。

パン・チャンさん (45)

カンプチア/ソ連友好技術大学(1980年設立)で5年間学び、今年からJVCの活動に参加した。ボルポト時代以前にはやはりメカニックであった。温厚な人柄で細かいこともおろそかにしない性格である。子どもが6人いて生活は大変である。

本来の19名の訓練生に加え、8月末からは社会福祉省との合意に基づいて、2つの孤児院から2名の少年を受け入れ、技術訓練を行っています。社会福祉省としては各県の16の孤児院から16名の少年を受け入れてほしいという要望だったのですが、こちら

JVC技術学校プログラムを応援して下さい

1985年企画されてから3年、JVCのカンプチアでの技能訓練プログラムも、ゆっくりした速度でしたが、容れ物としての工場、教室、事務室が昨年87年完成し、26人のカンプチア側スタッフ、訓練生もそろい、今年初めから理論講習を含む技能訓練が開始されました。8月末からは当初からの計画通り、孤児院からの少年2名の参加も得て、福祉的な面での役割も徐々に果せるようになってきました。

緊急救援でもなく、また母子保健や「飲み水」といった直接的具体的に分かりやすいプログラムではないかも知れませんが、今政治的にも解決にむかって動いているカンプチアにおいて、社会の復興に役立ち、特に技術面での人材を育て、更にひろくカンプチアの人々の社会再建への気持ちを励ますことのできるこのプログラムは、日本-カンプチアの小さなかけ橋として、今後価値を増していくと思います。

88年度(89年3月31日までの年度)各団体・個人の方々の御好意により約1000万円が確保されましたものの、技術者派遣費用、工具、修理部品などの資金約900万円が足りず、ここに各市民団体、個人の皆さんに、あらためて御支援のお願いを申し上げます。



リュウ・ソバル君(左)とチェン・ソック・キー君(右)

の受け入れ能力も限られていたので、まず2人から訓練を始めました。

リュウ・ソバル君(18)

1970年生まれ、ロンノル時代(1970~75)、お父さんはブノンベン技術学校の職員だったらしい。他にお母さんと2人の兄弟、妹1人と暮らしていた。75年4月17日のポルポト革命によりブノンベンから追い出され、コンボン・チャム県のプム・パティ村まで歩いた。1977年までに両親は殺害され、兄弟妹は病気と衰弱により亡くなり、1人ぼっちとなった。ソバル君はその後も同年配の子供たちと農作業や牛の世話などをさせられた。親戚についてはまったく分らない。

1979年1月のポルポト体制崩壊後、コンボン・チャム県の孤児院にひきとられ、同じような境遇の子供たちとともに暮らした。なかには家族とはぐれたまま分からなくなってしまった子どももいた。1981年ブノンベンから北15kmのブレック・ピノー孤児院へ移った。生まれ故郷のブノンベンに近いところで勉強を続けたかったからのようだ。

今年の7月に所長さんから話があり、機械の好きなソバル君が選ばれてJVC技術学校の訓練コースに入った。

メカニックの仕事がとても好きなので、人一倍覚えようという気持ちがありよく働いている。体も強い。本人も希望し環境も順調であれば、2、3年後には私たちのスタッフとして働いてもらいたいと考えている。

チェン・ソック・キー君(16)

1972年生まれ。1977年、父、母と相次いで亡くなった。憶えている限りでは兄弟姉妹はいなかったようである。1979年1月以降コンボン・チャム県の孤児院で育てられ、1985年からブノンベン市対岸のキン・クリアン孤児院に移った。

ソバル君同様、7月にJVC技能訓練の話があり、機械好きで器用なソック・キー君が選ばれた。指導員の話では教えたことを的確に実施するということで理解力も十分であり、適切な上級教育を受けられるチャンスがあれば、技術者(修理の実技だけでなく、設計したり製図したりする)にもなれるのではないかと評価されている。

ソバル君もソック・キー君も、面接をした私たちの方が圧倒されるような厳しい生立ちですが、むしろ明るく元気よくやっていて、頼もしい限りです。技術の仕事を一生の仕事として、社会人としても大成してほしいと願わずにはいられません。2人のケースが成功し、私たちの受け入れ能力も向上すれば、孤児院から他の少年たちが参加できる途も開けます。T/Eの読者の皆さんも応援して下さい。(熊岡路矢)

変わりゆくカンブチア

JVC事務局長 星野昌子

荒廃から立ち直るプノンペン

2年ぶりに訪れたプノンペン市は長引く雨期の曇天下でさえ、そのきわ立った復興ぶりで明るく私たち一行を迎えてくれた。前回には救援関係者が主だったポチェントン空港も、商売関係者と見られるベトナム人で混み合い、救援用と商品とを厳しく分けるためであろうか、JVCがバンコクで購入した医薬品のチェックに思いのほか時間がかかった。

大通り沿いに数軒見られる美容院が目新しい。それに若い女性の髪の艶が良くなったこと。彼女たちが以前から好んだ真すぐな長髪は、栄養不足の赤茶けた髪には向かない。家族連れが大通りに面したレストランに朝食をとりに来る姿も2年前には見られなかった。バイク、自転車が朝夕のラッシュ時には通り狭しと並んで走る。タイやシンガポールからの密輸でほとんど公認されているそうだ。来年一月のヘン・サムリン政権樹立十周年にあたって、「ベトナムのかいらい政権」といった色あいを一掃しようとの政府の懸命の努力が、道路美化にも表われているらしいが、それと切り離しても、人々の日々の暮らしの端々に巧まずに表われるわずかな潤いが、2年ぶりに訪れた私を慰めてくれる。

生まれた、生まれた、新しい子

今回の訪問の主な目的は政府保健省・母子保健局及びカンダール県保健部の合意を得てカンダール県プノンペン郡に、この4月から建設が進められていたJVC・RINEセンター（診療所兼母子保健所）の竣工式に出席することであった。一行はSHARE所属の医師1名と看護婦3名と私だった。到着後間もなく市の中心から西へ約20キロの位置にあるセンターへ下見に出かけた。伝統的なカンブチアスタイルの屋根をいただくコンクリート建築の平屋で、窓や出入口を広くあけて全体に風通しの良い造りになっている。当然のことながらカンブチア人の設計による。小雨がばらつく中を、明後日に迫った竣工式の準備に、庭に土を盛り、花を植え、竹製の舞台をしつら



えるなど、数名の県保健部関係者が最後の仕上げに余念がない。日本の理解者、支援者に加えて、カンブチア側でも大勢の協力者の知恵や労働が、このセンターの建設を可能にして下さったことを改めて思う。

新築されたセンターの裏側には、従来からの助産所（分娩室、産後の病室）と、そして横には郡病院があるが、あまりの貧弱さときたなさに気の毒で、横たわっている病人たちの土気色の顔や力無い目を直視できない。「ここが病院です」といわれなければ、物置か家畜小屋と見まがう。「お産まであと2、3時間よ。しっかりしてね」と助産婦さんに励まされていた小柄の若い女性は、少し離れた別棟のトイレへ通うのがいかにもつらそうだ。

病院の視察を済ませて分娩室の方へ戻ろうとした時、数名の若い女性の歌声がきこえて来た。歌詞はなんと、日本語なのだ。「生まれた、生まれた、新しい子」先程の妊婦が2、3時間待つ間もなく、出産したのだそうだ。日本語の歌は釘村千夜子さんから習ったのであろう。元気な男の子で、どんな人間をも感動させる新しい命の誕生の瞬間であった。この子供が成長した暁に、カンブチアが真の平和を取り戻すことを祈らずにはいられない。

消費へのあくなき欲望が人の世を墮落させる

10月3日、式の当日は清々しい天候に恵まれた。保健省、郡保健部の関係者と国連・NGO代表者約80名に加えて、看護学校の生徒達が多数列席した。この種のセレモニーはカンブチアでは珍らしくないのだが、心のこもった祝詞の数々に、国連関係者も式の後「非常に心に残る竣工式であった」と賞めて下さった。

私にとって最も印象深かったのは保健副大臣チア・タン氏の挨拶であった。長身の氏は質素な服装にゴムのサンダル姿で、終始知性と慈愛に満ちた表情で「現在外交のないヘン・サムリン政権下のカンブチアと日本、その両国の間にJVCというNGO（民間

公益団体)が存在して日本市民の善意の結晶として、ここにRINEセンターの完成を見るに到ったことは誠に慶ばしい」と述べられた後「大規模な破壊の後のカンブチアにはあらゆる物が不足している。したがって物の援助は確かに有難い。しかし人々の心の中に巣くう浪費(GASPILLAGE 仏語)への欲望が人間性を駄目にし、人の世を墮落させる。より便利なもの、美しいものを手に入れるために無駄に金を使うのではなく、今在る物をいかに最大限に使うかを考えなければならない」。思想家か教育者かと思われるようなこの言葉が、お役人の氏から発せられたことに驚くとともに、歯止めの効かぬ消費生活の危険に気付いているのか、いないのか、どっぴりつつかり切っている私達日本国民への警告でもあるかのように私には響いたのだ。式の後センターの内部を見せていただく間、チア・タン氏と歓談する中に、「センターの正面と道路の間にある堀に橋をかけて、道路から真直に入れるようにすれば便利だし、見た目にも美しい」と郡保健部の方が言われたのに対して、氏は、「それもガスビャージュの一つですよ。ちょっと廻り道をすれば、道はちゃんとあるのだから」と一笑にふされた。

後日改めて訪れた保健省でのニム・ニエム医師やアン・サルーン女史との会談においても、今回完成したJVCのRINEセンターをいかに多角的に利用するか、また、通院できない遠隔地の住民のためここを中心に自転車で移動診療相談を実施するなどの計画を熱心に語るのを聞き、海外で実動するNGOの意義を再確認する思いがした。

部品をもっと送って下さい

JVCワークショップの工場長として多忙の日々を送るタック・カン氏と30分程話し合う機会を得た。ワークショップ建設の準備段階から、JVCのカウンターパートの中心的存在としてご尽力をいただいて来た方である。JVCカンブチアスタッフに技術畑の諸氏への感謝の意を述べられるとともに、今後クメール人の技術研修に、より一層力を入れたいと熱をこめて話された。しかし、「それにつけてもパーツをもっと送っていただければ、より効率が上げられるのですが」と表現は柔らかいが、私としてはJVCの痛いところを突かれた思いだ。安定した財政基盤を持たぬJVCが、日本市民からの資金集めに四苦八苦していること、カンブチアに関してはことさらに理解を得難い部分があることを説明し、私達もより一

層の努力を重ねることを約束した。

国交開けぬあせりはNGOへ

今回の訪問は私にとっては1967, 82, 86年に続き第4回目であったが、カンブチア人の日本に対する感情の中に、前回までには感じられなかった一種のあせりのようなものを感じた。特に滞在最終日の夜、ホワイホテルで行われたJVC主催の夕食会の席上運輸省、保健省、外務省からの関係者(実務担当レベル)がぐだけた気分で語り進む中で、そのあせりがいっそう出たように思った。

隣国タイにチーチャイ首相率いる新政権が誕生してから、「政経分離」が変わると唱えられ、カンブチア側も討議の結果、貿易に関する話し合いのための使節にビザを出し、現在会談が集行中である。カンブチアの現政権を承認していない国との交流が拡がろうとして、激しい変化の波が押し寄せつつあることが聞いている私達にも伝わって来る。それについても日本との関係は、多少の通商やNGOによる小規模の協力にとどまっており、カンブチア側からの研修生派遣、あるいは日本における会議への出席もままならない。ベトナムの完全撤兵、その後の各派の力関係等々、予想を許さぬ要素を抱えつつも、日本との国交再開を望む声は高い。と言うより「なぜ日本はカンブチアの現実を認めようとししないのか」というあせりとなって表現されるのだ。彼らにとって、プノンペンに常駐しているNGOのJVCぐらいが、今のところそのあせりや不満をぶつけられる相手である。

保健省、運輸関係者はお役人とはいえ、JVCのプロジェクトの受益者、つまり村の病人、母親、子供達、または技術研修生などが自分達の現実の関心事としてはっきり見えている。したがって資金規模が小さくても、人と人との関係やカンブチア人の自主性を重んじて、じわじわと仕事する私達の仕事の意味も十分に理解してくれているようだ。しかし外務省関係者は日本との国交が開けぬあせりを、NGOといっても経済大国なのだから、もう少し大規模な仕事を手がけてもいいのではないかといった形でぶつける。こうした状況下でJVCがカンブチア政府とも友好関係を保ちつつ、尚かつ、NGOでなければ出来ない値の仕事を推し進めることが私達に与えられた課題である。そしてもう一步進めるなら、日本政府が協力を開始した暁においても、独自の分野で質の高い仕事が展開できるかどうかにあると考える。



いんたびゅう

自動車労連 足立房夫さん

日本の企業は

儲けるだけではだめです

JVCの行っているカンブチアのプロジェクトのなかで自動車修理のワークショップと技術学校は最も規模が大きい。建物もりっぱで一度に8台のトラックが修理できるほどである。(実際は交換部品がなかなか買えなくてフル回転にはほど遠いが)

放置されたままのトラックの山に胸打たれ、この国の輸送手段をなんとかしなければ、経済大国の弱少NGOが身分不相応なプロジェクトにがんばっている。もしこれがカンブチアでなければ、とくに政府の援助が入っているだろうが、ここは西側と国交のないカンブチア。NGOがやるしかない。ところが今一つこのプロジェクトに対して一般の関心は高くない。

そんななかで、当初よりJVCカンブチアを支援して下さっているのが自動車労連・福祉基金事業部専務理事の足立房夫さんである。足立さんにカンブチアの道路・輸送状況、及び日本の企業と援助のあり方などについてお聞きしてみた。

JVCとのおつきあいは1980年からです。福祉事業部の調査チームとしてタイのスラムを視察に行った時にJVCも訪問させていただきました。その時のJVC代表の川口さんとわれわれのメンバーの1人が知りあいだったのです。

1982年には別のメンバーが難民キャンプを訪れ、当時ウボンにあったJVCの技術学校にカットエンジン、チェーンブロック、修理工具、中古車なんかを送らせてもらいました。そのうちのいくつかは今もカオイダンに残っていると思いますよ。

その後JVCが阿佐ヶ谷にあったころだと思いますが、カンブチアへ修理技術をもった人を派遣してくれないかと頼まれたことがありました。その時は現地の政情が混んとしており、おことわりしたんですが。

* *

カンブチアを訪れたのは昨年のことです。ワークショップ/技術学校の落成式に参加させていただき

ました。プノンベン市内に廃車になった名古屋市交通局のバスが走っていました。文字は消してありましたが、たしかにあのグリーンを主体にした色は名古屋市のバスです。

日本でとくに廃車になった車がカンブチアでは現役です。車がかわいそうと思うのと同時に、あそこの人々をなんとかしてあげたいと思いましたね。輸送手段が決定的に不足しています。2輪のバイクに大きなリヤカーのような車体をくっつけて大ぜいの人を乗せていますが、あれぐらいではとても市民の足としては足りませんし、危険ですね。

それから道が悪いので車の傷みが早いようです。これは政治の責任かとも思いますが、なんとかしなければ。ソ連などが手伝って穴を埋めるなどのつぎはぎの修理はしているようですが、全面的に舗装しなおすにはまだまだ時間がかかるでしょう。

* *

カンブチアの人々に会い、経済大国日本にかける



自動車労連から寄贈された
フォークリフト(左)とピッ
クアップトラック(右)

期待の大きさを感じましたね。しかし日本での理解はまだまだですから、そのギャップの中にいるJVCは本当に大変だと思いました。

西欧のNGOの関係者は彼らの生活様式をそのままカンブチアに持こんでいます。ゆとりさえあります。それに比べJVCの人は時間と肉体を切り売りしている印象があります。日本人は商売には金をつぎこむけれどJVCのような活動には関心が薄いですから。日本バッシングの原因もこんなところにあるんじゃないですか。

カンブチアでJVCが修理しているトラックは日本製のH社とM社ですが、その関連する組合を通して部品の調達を依頼したがダメでした。激しい競争のもと無料で大量の部品出すことはできない。できるだけ安くするから商社を通して買ってくれ。そういうことよりもパリーダカーラリーで入賞することの方がずっと意味があるわけです。

T社のランドクルーザーなど国連機関で最も多く使われている車だと思いますが、従業員の方々はそうした実情は全く知らないでしょう。

* * *

もしカンブチアが新しい体制になって援助が解禁になれば、小型トラック、大型トラック、それに建設機械が押し寄せるでしょう。その結果日本人は儲かればいいんだというイメージになってしまうのではないかとおそれています。

あそこで暮らしている人にとって平和でありさえ

すれば、政治体制はどうでもいいのです。私たちともしろいろな共通項があるので協力できることがあるはず。自動車労連の中ではこのような考え方も理解されてきていますが、もっとたしかな支援とするために自動車総連（自動車労連の上部団体）にも独自の視察チームを作してほしいと働きかけています。これらの会社から毎年1台ずつでも中古の車輛を送ることができたら、カンブチア側から見ればそれは大変大きな支援になると思います。

ところでカンブチアでメカニックをやっている馬さん、お元気ですか。なぜかあの人のことが一番気になりますね。最初にここにお見えになって「自動車修理のテキストがほしい」といわれ、その時いろいろお話ししたからかもしれませんが。馬さんは熊岡さんや簗田さんと違い海外の経験もなく、いきなりカンブチアでしょう。なんでJVCでなんでカンブチアだったのか興味があります。

それだけに、馬さんにはぜひがんばってもらいたいですね。

自動車労連（日本自動車産業労働組合連合会）

昭和30年に結成され、これまでに福祉施設などへの物品・資金援助や奉仕活動、福祉施設の子供たちを招いてのチャリティー公演、交通遺児への奨学金援助、東南アジアの人たちへの援助などを行っている。今年もJVCカンブチアのラインセンターにニッサンのピックアップを自動車修理学校にフォークリフトを寄贈した。

クメール語

釘村 千夜子

カンブチアに行く前、クメール語とタイ語は2割ぐらい同じ単語がある、と聞いていました。以前2年はどタイにいたので日常タイ語は話せると思っていましたから、もうすっかりクメール語への不安は消し飛んでしまいました。8割はわからないというのにもかかわらず……この楽天的な事。こうして始まったカンブチアでの5カ月は、この2割を駆使して過ぎたようなものです。

タイ語のおかあさんともいえるこのクメール語の最もおかあさんのような雰囲気を感じるのには「はい」の言い方です。タイ語と同じ様に、女性と男性では言い方が違います。女の人はタイ語で「カァ」と発音

しますが、クメール語では「チャー」と言います。男の人はタイ語で「カップ」というのをクメール語は「バァ」、時には「バア、バア」、つまり「はい、はい」と言う時もあります。「チャー、チャー」、「バアー、バアー」、どちらもおかあさんが赤ちゃんに話しかけているように思えます。

タイでは恋人同士や、親子の間での甘えた言い方として「チャー」が使われます。カンブチアではこれを日常に話し、もちろん、会議の席でも、「チャー」と返事をしていると自分がその人ととても親しい関係のような気になり、まるで他人とは思えなくなります。

『カンブチアに関するNGOフォーラム』

カンブチア事業担当 古西 勇

国連総会の通常会期が開かれたばかりのニューヨーク市、CWS (Church World Service) 事務所で、1988年9月22、23の両日「カンブチアに関するNGOフォーラム」が開催された。86年9月アムステルダムでNGO会議が行われてから、丸2年が経ち、通算で第四回目のNGOの集まりとなった。従来はヨーロッパで開かれていたNGO会議であるが、今回は次の理由により特別にニューヨーク市で行われることになった。

第一に、より多くの北アメリカのNGOが参加できるということである。第二に、9月20日に始まり12月半ばまで続く国連総会の通常会期においてカンブチア情勢に関する討論がなされる前に、それぞれのNGOが自国政府の国連代表部を訪れることができるということである。

筆者自身、JVCを代表してこの会議に参加し、その後日本政府国連代表部を訪れた。そこでカンブチア問題の担当官にお会いし、率直に、特に目前に迫った国連総会における討論と決議案の作成において何が肝要であるかという、次のような意見を聞いていただいた。

1. 国連総会における「カンブチア情勢に関する決議案」に、新しくポル・ポト派の復権を阻止するための表現を盛り込もうとする、東南アジア諸国連合(ASEAN)の提案を支持すること

国連総会は国連の主要審議機関である。これは各国が一票を持つ全加盟国の代表によって構成される。平和と安全保障に関する勧告などの重要問題の票決は、三分の二の多数を必要とする。

カンブチア「決議案」は毎年ASEANが提案。ポル・ポト、シハヌーク、ソン・サンの三派で構成する民主カンブチア連合政府(CGDK)を支援し、カンブチアからの外国勢力(ベトナム軍)の全面撤退を求め、昨年は117カ国の賛成を得ている。カンブチア人民共和国(PRK)を支援する21カ国はこの決議案に反対の票を投じ、他に16カ国が棄権した。

新しい表現は、85年の国連事務総長のカンブチア

に関する文書で初めて使われたと言われる「過ぎ去ったばかりの普遍的に非難を浴びている政策と実施に戻らないこと」という婉曲なものであった。

ASEANの動きとは別だが、ニューヨーク市に本部のあるカンボジア資料委員会は、6月末、各国首相宛に手紙を送り、国連総会における決議案の条項の中に次のような新しい条項を盛り込むことが絶対に必須であることを強調した。

「カンブチアの宗教・民族集団を実質的に滅亡させ、クメール人集団自身を部分的に滅亡させようとしたことを含む、国際的に認められた人権の重大でひどい違反に対して責任のある人々は、外国占領軍の撤退の場合には、政治的権力の地位に戻れるようにさせられないこと」。

この手紙は、ポル・ポト政権時代の虐殺を免れ現在西側に出ている2,000人以上のカンブチア人の連署をもって送られ、映画『キリング・フィールド』の主人公のモデルとなったディット・ブランが連署人の代表となった。

アメリカの国会においても、この点が討論された。ベトナム軍の撤退と同時にクメール・ルージュが権力を取り戻すことを阻止するために、アメリカが自由に使えるあらゆる手段を用いることを要求する決議案(H.J.Res. 602)が今年8月8日、チェスター・アトキンズ下院議員らによって提出され、下院を満場一致で通過した。この決議案は、7月のテッド・ケネディ上院議員らとの共同決議案が修正されたものである。上院では、下院を通過した決議案と同様のもの(S.J. Res. 347)が、9月16日に是認された。

アメリカのNGOが国会議員に対して積極的に働きかけたことはいうまでもない。

2. 国連におけるCGDKの議席に関する議案の採決を提議すること

国連は、国連憲章の義務を受け入れ、その義務を履行する能力と意思があると認められる全ての平和愛好国に開放されている、と言われる。国連におけるカンブチアの議席問題は、対抗する二者がそれぞ

1979年以降の国連カンブチア決議結果

	賛成	反対	棄権	欠席	賛成率
1979	91	21	29	10	62 %
1980	97	23	22	10	64
1981	100	25	19	11	65
1982	105	23	20	9	67
1983	105	23	19	10	67
1984	110	22	18	9	69
1985	114	21	16	8	72
1986	115	21	13	10	72.5
1987	117	21	16	5	74

れ加盟国の正統な代表を主張する場合に、どちらに代表権を与えるか、表決による決定を必要とするいくつかのケースの一つである。

どちらに代表権を与えるかを選択する国連総会での手続きの面では、①国連総会で特別議題として提出される（1971年10月の決議により、中華人民共和国政府の代表は「国連に対する唯一の合法的代表であると認め」られ、蒋介石政権の代表は国連とその関連機関で不法に占めている場から追放された）か、②国連総会信任状委員会で審議される（1960年のコンゴ共和国、61年のイエメンの場合）かのどちらかによる。

信任状委員会は国連総会の会期ごとに事務総長が9カ国を任命する。

国が国連加盟国を代表することと、他の諸国により承認されることは、法律的に分けて考えられる。大部分の国々の慣習では、「承認」行為は基本的に政治的決定とみなされ、それぞれが自由な状況認識に従って決定する。一方で「代表」の決定は政治的でなく、合法的に動機付けられた集団的な行為によるはずである。しかし多くの国々は、それぞれ個別の「承認」政策に従って、「代表」信任状の問題に関して投票する傾向がある。

それ故、代表信任状の議案の採決の提議は、度々政治的なものであり、合法的に代表信任状を提出した政府が国家領域内で「実行支配力」を行使して「大部分の人々を常に統治している」かどうかの審議は、国連総会信任状委員会で一貫してなされてきたわけではない。

カンブチアに関しては、ベトナム軍の侵攻後の1979年9月の国連総会第34会期以降、信任状委員会はPRKではなく、民主カンブチア（DK）もしくはCGDKの信任状を受理してきた。その投票に先んじるカンブチアに関する討議においては、信任状委員会のメンバーの大多数により実行支配の審議がなさ

れなかったことは明らかである。

これは何故かと言えば、①PRKはベトナムの侵攻と占領の直接の結果として権力を身につけたため、代表権の主張を行うのに必要な独立性を欠いていた②信任状委員会の仕事はDKもしくはCGDKの信任状を審査するだけの技術的な仕事に限られていた、という理由が挙げられる。

①に関して言えば、カンブチアと同じ様な状況で代表権が争われたイエメンの場合は、1961年、5万人のエジプト軍の直接の支援を受けて当時の政権を領土の片隅に追いやった革命政権の信任状は、信任状委員会で議論なしに受理された。つまり、国連はこのような問題を解決するのに、一貫した法律の規準というものを持ち合わせていないのである。

少数の国々は、PRKは「十分にしっかりと全領地を支配している」ため、DK政府の信任状を受理することはなほだしいカンブチアへの内政干渉に等しいことを強調した。しかしながら、この議論はうまくいかなかった。

②に関して言えば、79年9月の国連総会でのカンブチアの議席を空席に保つべきだという提案は、「手続きの規則に不調和であり、以前の実行に矛盾している」として拒絶された。

代表権の議論は、一貫して、合理的で、公平な作法によって解決されるべきであろう。

カンブチアの議席問題が今回浮き上がってくるかに見えたのは、シハヌーク殿下が「現在三派連合政府によって持たれている国連におけるカンブチアの議席は、国際社会を励まして、カンブチアのために早く正しい解決を求めていくため、今年は空席にすべきだ」と主張したと報じられたからである。

しかしながら、公式には、シハヌーク殿下はその主張をまだ表明してはいない。殿下が7月にCGDKの大統領職を辞任したのは、「クメール・ルージュの力を弱め、それを孤立させる」ことがもくろまれていたと伝えられており、CGDKは「クメール・ルージュのためのスクリーン」であると殿下が述べたと伝えられた。クメール・ルージュを牽制するための議席の空席化の主張は、殿下の本意であるだろうと思われる。しかし、殿下にとってみれば、今の時点で議席を空席にすることは、まだ撤退を完了していないベトナムに利することになり、反ベトナムの姿勢を崩さないために、無条件に主張できないであろうと思われる。

シハヌーク殿下がCGDK側にいる限り、多くの国

々は、たとえクメール・ルージュが同じ側についていても、CGDKを支持し続けるであろう。

しかし、CGDK形成宣言によれば三派連合はDK政府の「法律と枠組みの下にある」ため、「もし連合が解散したとしても、クメール・ルージュはDK政府として国連の議席を保有するだろう」と報告されている。実際、CGDKの国連代表部常駐代表は、クメール・ルージュに任命されたティオウン・ブラシット特命全権大使である。シハヌーク、ソン・サンの各派の外交官は、連合政府代表部とは分かれて事務所を持つ。言い換えれば、連合政府代表部はクメール・ルージュにより運営されている。

ブラシット大使は、国連安全保障理事会の文書で連合政府常駐代表として、9月20日CGDK国防調整委員会委員のソン・セン大臣のメモを国連事務総長宛に提出した。セン大臣は、30年以上にわたりボル・ポトと緊密に働いてきた人であり、DK時代に防衛大臣の任にあり、1万8,000人が拷問により殺されたトゥールスレン政治犯収容所の責任者は彼に直接報告を行っていた。

セン大臣は、そのメモで「ハノイ指導者たちとブノンペンにベトナムによって樹立された反逆者たちは、カンプチアとベトナムの人々の集団殺害に対する責任のあるような犯罪人たちである」とし、「彼らは東南アジアのヒットラーだ」と非難している。これが、国連の文書で、シハヌーク、ソン・サンの各派が同意しているかどうかにかかわらず、CGDKを代表して出て来る見解である。DK時代に自分たちが行った100万人以上の集団殺害に対して、クメール・ルージュの指導者たちは、果して罪の意識を持ち合わせているのだろうか？

この点に関して、ニューヨーク市で最近注目されるべき動きが二つあった。

一つは、9月23日に報道発表された、世界7カ国のノーベル賞授賞者12人の連署による、①ボル・ポトが支配する連合政府の承認の取消し ②国連がスポンサーとなる選挙が開かれるまで、ブノンペンの事実上のカンプチア政府の条件付き承認の訴えである。

もう一つは、10月5日に国連ビルの目前において、ディット・ブランとOxfam アメリカが共同で、①ボル・ポトとクメール・ルージュの国連における議席を取り上げること ②アメリカ人と国連にカンプチアに対して人道・開発援助を供与するよう促すこと ③ボル・ポトとクメール・ルージュ指導者がカンプチアに復権することが許されないことを保証しなが

ら、活動的に国際的にモニターされる政治的解決を求めるよう、アメリカ、中国、国連を励ますことを要求するために開かれた「徹夜の祈り」である。祈りは翌日未明まで続けられた。

3. クメール・ルージュの支配下にある難民キャンプにいる難民たちに、他の派のキャンプに移動する自由を保証すること

前述のソン・セン大臣が責任を持つファイチャン難民キャンプは、今年5月初めに食糧などの援助が一時中止された。国連は、クメール・ルージュのキャンプに国連職員が自由に出入りできるよう、キャンプの指導者たちと長い間交渉してきたが、ついに交渉が決裂したのである。

ファイチャンのある北部国境地帯には、ナトラオ難民キャンプがあったが、食糧援助を担当するUNBRO(国連国境救援機関)に事前の相談もなしに、他の地に移動した。その後ファイチャンは彼ら自身により閉鎖され、そこにいた住民は、ナトラオにいた住民とともに、新しい3つのキャンプを形成した、と国連は知らされた。しかし、UNBROはこれらの動きを証明する手段は持たず、これらのキャンプに国連職員が近づくことは、ずっと不可能であるか、次第に状況が悪化してきているかのどちらかである、と国連の報告書は伝えている。

南部国境地帯では、タルアン難民キャンプの人口7000人が、やはり事前のUNBROへの通告も相談もなしに、どこか他の地に移された。残された2000人足らずの難民は、老人や身障者を中心とすると伝えられた。7000人の難民がどこへ連れて行かれたかについては、国連は何ら情報を持たない。あるNGO関係者は、「クメール・ルージュが難民を盗んでしまった」と評していた。

中部国境地帯のクメール・ルージュの支配する最大の難民キャンプ「サイト8」は、他の彼らのキャンプとは違い、国連職員やNGO関係者が出入りできる唯一のキャンプである。今年4月21日と6月23日、2件の即決の死刑執行、いわゆる処刑がキャンプ内で行われた。犠牲者はそれぞれ23歳と30歳の男性で、兵役に服することを拒んだ人たちである。8月3日には、キャンプの外で捕えられた難民が、クメール・ルージュの保安要員により拷問され、殺されるという事件がサイト8であった。

サイト8で活動する救援関係者の報告によれば、どんなに控え目に見積っても、サイト8の50～70%

の居住者は潜在的にキャンプを離れたいと思っていると報告されている。

前述のアメリカの国会での決議案には、この点に関して、次のような条項が盛り込まれている。

「(9) (アメリカ合衆国は) 次のことを保証するように目指すべきである。

(A) クメール・ルージュの支配下にある難民キャンプは、国際機関の査察に対して公開されること。

(B) 同キャンプ内の人々は、もし本人が望むなら、クメール・ルージュでない他の派の支配下にあるキャンプに移動する自由を持つこと」

この決議案が採択されたことにより、アメリカ政府は、クメール・ルージュ支配下の難民キャンプでの人権侵害に対して、今年10月初めて警告を発した。

4. カンプチア国際会議の開催を支持すること

パリ発9月23日付のAFP電で、ミッテラン大統領との会談を終えた後でシハヌーク殿下が述べたと伝えられたことによれば、フランスは国連安全保障理事会の常任理事国5カ国を含めた「カンブチアに関する国際会議」が開催されるよう、喜んでホスト国になるつもりだ、ということである。

「国際会議」は1981年7月に行われて以来開かれていない。それが再び開催されるまでには、十分な根拠が必要であろうが、カンブチア問題の包括的政治解決への交渉の枠組みを組み直すために、早期に「国際会議」が開かれるよう諸国政府が支持することが必要である。

5. 政治的考慮から切り離して、カンブチアに再建・開発援助を供与すること

1969年以来、カンブチアに関する世界銀行の報告書は作成されていない。ブリュッセルで開かれた第三回 NGO 会議で、カンブチアの関係当局の人々が総合的な開発計画の概念を理解し、それを表現する能力を身につけられるよう、NGO にできることを彼らに申し込もうという提案が出された。

カンブチアで自国の開発に携わる人々は、それぞれの分野においてそれなりの計画があるだろうが、総合的に全ての分野を網羅した内容の開発計画は、まだ作成されていない、と思われる。カンブチアで活動する NGO は、ユニセフを除けば西側で唯一の開発援助の活動に携わっているという、ユニークな位置にある。

NGO の提案は、①カンブチアの関係当局自身の中

期的な開発計画をうまく反映させた、総合的な開発計画の立案を助けること ②国際的な援助国・機関に、彼らが将来カンブチアに開発援助を供与することになった場合、どういう手段が一番適しているのか、完全な基礎資料を提示すること、という主な目標がある。

それは、政治的解決が実現してから始めたのでは遅すぎる。諸国政府は自国の NGO を通して、現状を踏まえて人道的必要性に応じた援助を行うべきである。同時に、将来の相互依存を見通して、一旦政治的解決がもたらされた場合にすみやかに開発協力が始められるよう、総合開発計画の調査のためにも ODA (政府開発援助) を供与してほしい。

今回のフォーラムでの合意を受けて、NGO 間で「カンブチアへのコンサルテーション・ミッション」の草案が作成されている。

以上の主張は、次の点を見落としているとして、批判されるかもしれない。

一つは、ベトナム軍の徹退を監視する国際監視団をベトナム側が受け入れない限り、ベトナム側に利するようなことは日本政府としては一切できないだろう、ということである。もう一つは、ベトナム軍徹退後のカンブチアで治安が保たれることを保証するには、クメール・ルージュに対する軍事物資の補給に関係している国々に、それを停止させることが国際社会の責任である、ということである。

事実としてベトナムは、もし政治的解決が見られれば、1990年3月までには徹退を完了する、と言っている。また、もしクメール・ルージュに対する軍事物資の補給が停止されるという「解決」が見られたら、その時期を早められるだろうとも言っている。

前述のアメリカの国会での決議案では、この点に関して、アメリカ合衆国は「クメール・ルージュを支持し聖域を与えている国々に対して、その行為を中止するよう促すことにより、武器や軍事装備がクメール・ルージュに流れることをすぐさま停止させるよう試みるべきである」(第10項)と主張している。

日本がカンブチア問題の解決に対してどういう役割を果たせるのか、これから探っていきたい。

(注) 11月3日の国連総会において、本文1の新しい条項を盛りこんだASEANの提案は、賛成122、反対19、棄権13で採択された。

緊急救援から緊急協力へ

嶋田三芳

難民や飢餓民が発生するなり、速やかに緊急救援が始められる。その活動に NGO も必ず加わるといっても過言ではない。いや、今や NGO なしでは緊急救援はあり得ないとさえ言える。

しかし、その従来行われてきた緊急救援は果たして適切なものなのだろうか。

緊急救援をもっぱら行う NGO もあるが、一般的に、「緊急救援はお金と人がそろえば容易に実施できるが、一時的な対症療法であって、その緊急状況を生み出した根本原因をなくすのは極めて難しい。しかし開発協力は、お金も人も集まりにくいものの、社会を根本から変革しえる」という論法がある。

しかし、本来どちらも、社会を根底から変革できる理念と実践を内包していなければならなく、それがゆえに、どちらの活動も難しく、また同等の意義を持っている。にもかかわらず、前述の論法が優勢になった。それは、緊急救援を行う際に、いわゆる「救援する側」と「される側」の双方が大きな問題点を持っているからであろう。まず、この問題点をあげてみよう。

緊急救援する側の問題は「押し付け救援」である。つまり、助力を必要としている人々の真の解決を目指すのではなく、救援する側の都合に重点を置いた救援が主流になっている点である。そして悪いことに、この問題点は「人道的援助、人命尊重」という言葉の裏に隠されてしまい、異論を唱えにくくしている。

ここで具体的に話そう。難民が発生すると、国連機関や難民受入国はもとより、NGO などが緊急救援を速やかに開始する。水、食糧、医療、住居、衣服などを供給するため、まず海外から物資と人、資金のほとんどが投入される。実はここに問題点がある。難民たちが食べたこともない食糧、使ったことがない医薬品や資材、着たこともない衣服、乗ったこともない車、接したこともない価値観や文化などいわゆる「先進国」の世界が怒涛のごとく押し寄せる。

そしてもし、緊急状況が去りながら形だけの緊急救援が続けられれば、いつしか難民たちは先進国がリードする世界的システムの中にしっかりと組み込まれてしまう。彼らが難民でなくなっても、そのシステムに大きく依存することになる。すなわち、べらぼうな値段で先進国から工業製品などを輸入し、その代わりに農産物などの一次産品を先進国へ輸出しようとするれば二束三文にたたかれるのである。

つぎに、「救援される側」の問題点をあげれば、それは「救援依存症」である。例えば難民の場合、彼らは難民であり続けなければ少なくとも生存は保証されるので、あえて自分からそのステイタスを放棄することは非常にまれである。もともと人間は安きに流れがちな点を考慮すれば、この依存症に対する責任の一端は「救援する側」にもあろう。

さて、従来の緊急救援はこのような問題点を引きずっているが、その改善策を模索すると、たとえ緊急的な活動とはいえ開発協力の理念に行き着くように思えてならない。それは、自立性とか、地域の尊重とか、住民の主体性、自然環境と人間の調和、対話、参加、協力などといったものである。すなわち、「緊急救援」ではなく、「緊急協力」である。

ここでまた、難民が発生した際の食糧配給を例にどんな活動が「緊急協力」といえるのか探してみたい。まず、彼ら難民たちがどんな食習慣を持っているか知らねばならない。（地域の尊重、対話）つぎに、その食習慣にあった食糧を難民受入国かその周辺国から彼らとともに調達し適切に配る。（地域の尊重、住民の主体性、参加）そして、できるだけ早く食糧配給が要らなくなるように難民自身が卒先して多角的農業を始め、外部の者は徐々に撤退していく。（自立性）

もちろん、「緊急救援」から「緊急協力」へ移行するには多くのリスクと堅牢な障壁があろう。地域の尊重ということで地元にある医療のみで緊急時に対応すれば、近代西洋医療を施した場合よりも死亡率が高くなるかもしれない。

しかし、「緊急協力」のリスクと障壁をいくら列挙したところで、押し付け「緊急救援」の弊害はもはや疑う余地がない。人の命を一時的に救えても、人の心と未来は確実に蝕んでいくのである。

今からでも遅くない。せめて我々 NGO からでも「緊急救援」から「緊急協力」へ移行しようではないか。試行錯誤をくりかえしながらも。

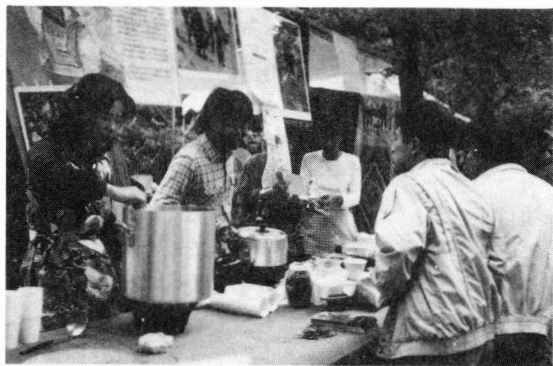
JVCNEWS

世田谷雑居まつりに参加

〔国内活動ボランティア大募集中〕

10月9日、JVCは世田谷雑居まつりのバザーに出店した。内容はタイカレーとラオスコーヒー・布・グッズの販売等。売り上げは——はっきり言って△である。労の割に5万円は少ない。が、別名“10円まつり”と言われる会場では健闘した方だと思う。今回の出店目的は4つある。①バザーに慣れる ②人材の発掘 ③広報活動 ④資金 この中で①～③については良かった。特に前日のカレーの仕込みでは、玉ネギに涙する殿方。玄人はだしのイモむき娘など個人の意外な面に触れつつ楽しく行う事が出来た。皆で初めてのバザーにTryする——この点だけでも参加の意義はあったと思う。

私は2月にタイに行った。JVCを見て「こんなに頑張ってるんだ！」と驚く反面「なぜ有名じゃないの？」と疑問。正直なところ、JVCは海外に強いが



国内はまだ弱い。もっと国内でJVCを広めたい。国内で出来る事は山ほどある。バザー、コンサート、講演会、内部の学習会・読書会、出版、ビデオ作成、チャリティーグッズの販売など。これらの活動を通して地域にJVCを広めながら資金集めもできる。JVCも寄付ばかりじゃネ。経済的にちょっぴり“自立”出来たら良いでしょう。国内でもする事はいっぱい！ Trial & Error——皆で楽しく始めましょう。国内ボランティア大募集中！ （白石尚子）

ソマリアスタッフに 久々の女性

磯田厚子さん



浜野敏子さん、庄司美さんが帰国して以来この1年ほど女っ気なかったソマリアチームに、久々の女性が加わった。11月に帰国する荻ノ迫さんに代わり、ルークのチームリーダーになる磯田厚子さんである。磯田さんはこの8月まで女子栄養大学の講師を勤め、今回は助教授のイスをことり、ソマリアへの道を選んだ。

磯田さんのJVCとの出会いは1983年にさかのぼる。当時タイ・

カンブチア国境のノンチャンで働いていた大野さんに、給食プログラムの相談を受けたのがきっかけだった。84年の夏国境での調査を行い、85年、今度はカオイダン・キャンプを訪れた。磯田さんはそのとき出会った人々の暗い表情を今も忘れられないという。そしてそれ以来大学の教え子の人たちを巻きこんでJVCの活動に“どっぷり”とかかわることになったのである。

ソマリアは男社会だが、そういう所でチームリーダーを勤めることに不安はないかどうか尋ねたところ、「むしろ興味がある」と頼もしい答が返ってきた。学生の時から同じ大学だったので女の世界から男社会へと、まさに激変なのだが、1年ぐらいいはソマリアという土地を観察するつもりでボチボチやるという。さらに「栄養学をほんとうに生かせるのは第三世界しかなく、そういう所で働くことは大学で研究を重ねるよりもはるかに意味のあることと思う」とその決心のほどを語ってくれた。また本当に西洋流の栄養学がアフリカで役に立つのか考えたいという。

第三世界ではまず主食を満たすことが必要で、3つの栄養群を押しつけるのには疑問を感じている。

書評『バナナから人権へ』

— フィリピンバナナをめぐる市民運動 —

池住義憲 杉本皓子 中村洋子 共著

同文館
(1,200円)

バナナで思い出すのは小学生の時、風邪で休んでいると母親が、特別にバナナを買ってきてくれるのがうれしかったことである。ついでに言うなら、私はバナナがめちゃめちゃ好きである。誰かがおみやげに持ってこようものなら、1人で10本くらい食べてよくおなかをこわしていた。

ところが、ある時期からバナナは不当に安くなりだし（消費者にとってはありがたいことかもしれないが）、特別な物ではなくなってきた。

最近のバナナは安いわねえ。なんて言いながら、パクパク食べていた私は、『消費者レポート』が何かでバナナの背景を知ってしまい、バナナを手にするのをためらうようになってしまった。

そして、PARC（太平洋資料センター）出版の『フィリピンはもっと近い』を読んで、バナナにた

っぷりかかる農業、そしてその同じ農業を素手同然で扱わざるを得ない労働者、労働者にふりかかる土地の強制退去、職無し、家無し、食べ物無しのなかでの一生を知って気分が暗くなってしまった。

そんな時、“ばななぼうと”で著者の中村さんや杉本さんに会い、愛知県でフィリピンバナナについて活動しているのを知り、励まされた。

今、バナナを食べなくなれば、フィリピン労働者の賃金は下ってしまう。そうするとますます生活は苦しくなってしまう。それでは問題解決にならないので、まず何から始めれば良いのか、“ばななぼうと”の中で、一生懸命話をしていた中村さんや杉本さんの顔思い出してしまう。私自身はフィリピンの人を知らないし、バナナを見つめて、「そんなにたくさん問題をしょっているのか」と実感



するにはほど遠い立場にいるが、よくよく考えてみれば、私たちの生活の中には、食料、木材、パルプなどありとあらゆるものが第2第3のバナナとなっている現実がある。

バナナを食べながら、今回出版されたこの本を読んでもみるのも良いだろう。読み終わった後、バナナを食べ続けるか、はたまた縁を切ってしまうか、何か別の行動をとるか?!

私たちの台所には第三世界が所狭しと居座っていることを、手にとって感じてほしい、そう願わずにはいられない。

(柴田くす子)

JVCフォトコンテスト

JVCでフォトコンテストを行います。会員の方も会員でない方も奮って御応募下さい。テーマは2つあります。

A. 第三世界の人々 B. JVCの活動現場

モノクロ、カラー、どちらでも構いません。サイズも自由です。締め切りは12月31日（消印有効）。発表は来年2月号の本誌で行います。スタディーツアーに参加した皆さん、期待しています。

特選 A, B各1点、入選 A, B各3点の写真は、JVCの広報などに使わせていただきます。なお審査には、写真家の石川文洋さん、森枝卓士さん、JVC代表の岩崎駿介、およびJVCの各執行委員によって行われます。

（問合せは前川まで）

トライアングル



左から佐久間さん、村田さん、立川さん

立川勝得(かつのり)さん、村田恵子さん、そして、佐久間典子さんといえは、泣くも黙る……というわけではありませんが、元気のいい3人組です。

立川さんは「トライプリント」という印刷会社の社長さん。村田さんは『主婦と生活』、佐久間さんは『ミセス』と一流雑誌の元編集者。どちらかというと、人はいいのだけれど不器用な人の多いJVCのなかで、口八丁、手八丁、恐いものナシの30代トリオ(少なくとも取材したときは)です。

関連のある仕事に付いているからか、はたまた気が合うからか『トライアングル』というグループを作って活動を始めました。今回はこの3人組の登場です。

口八丁、手八丁の3人組のこれまでは……

まず、立川さん。全共闘時代に始まった宇井純氏の自主講座(当時、東京大学助手であった宇井現琉球大学教授が公害など環境問題を中心に開催、継続した公開講座)を手伝ったという古強者。チラシを印刷した縁でJVCに関係し、今はよその会社で印刷したT&Eの郵送分を、郵便局に届けるのがお仕事。「毎月かならずやっていただいて大助かり」と編集長のMさんも話しています。

お次は村田さん。雑誌記者時代に、事務局長の星野さんを取材したのが、ご縁の始まり。現在は、UNHCRの日本語版機関誌『レフュジーズ』の編集に携わるかたわら、タイの地域開発活動の機関誌『プラン』(T&Eの付録です)の編集をしています。ダンナさんとお子さんがいますが、別の団体のお金で2度もタイに行くという『才能』の持ち主。

最後は佐久間さん。結婚して、勤めをやめて「や

ボランティア登場7

ることがない」から始めたJVCの手伝い。持ち前の実力を発揮してT&Eの編集を手伝ったりしているうちに、アフリカに魅せられてしまいました。以後、恵まれたダンナさんと経済力にまかせて、ソマリア、エチオピア、マリ(サヘルの会の活動地)と3度も自費で出掛ける始末。しかも、ソマリアから帰ったあとは、写真展を開き写真集を自費出版する勢いです。

JVCが縁で共同事業を開始

さてこの3人がふとしたきっかけで知り合い、作ったグループがトライアングル。ただの仲良し会ではありません。最初に作りかけた『エスニック料理の本』こそつぶれましたが、UNHCRのQ&A集、某企業の社内報などを作って評判は上々。特に後者は「3大新聞と、2大地方ラジオに取り上げられるという出来栄で、異例の増刷をした」(関係者の話)とか。これからも、個人の仕事と両立させながら、ますます活動の幅を広げていきたいとのこと。頼もしいかぎりです。

この3人ですが、普段の役回りは「JVCのPTA」(本人たちの話)とか。大人の常識と、むかし鍛えた原則論をミックスしてスタッフをやりこめることもあります。そんな彼らに、最近の印象を聞いていました。

「基本的にはいいヤツたちだよ。かねにもならないことを一生懸命して」

「ときどきムキになって可愛げもあるし……」

「でも、昔のほうが、若くて元気のいい人が多かったわね。十代の子もいたし」

「基本的には、私、若い人を信用していないの。流行に弱くて、わっと来て盛り上がったと思うとすぐいなくなるし……」

「それはJVCが発展して、プロフェッショナルな人材を探すようになったせいもあると思うよ」

「でも若い人が少ないのは淋しいな」

「プロと若い人と両方入る組織が強いよね」

「それに私、若い人が好きだから」

どうぞ恐らないでください。口はちょっと悪いけれど、気のいいオジさんとオバさんたちです。引くところは引くし、誰とは言いませんが、金離れとノリのよさで宴会の王(あるいは女王)と呼ばれた人さえいるのです。(A.G)

JVCプロジェクト

1988年10月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第2, 3土曜日 午後2時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加藤志保, 林 達雄 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。 10月16日(日)・「第2回チャリティーウォークかながわ」が行われた。天気に恵まれたさわやかな秋晴れの1日, 車いすや家族連れの参加者約350人がそれぞれのペースで, 横浜市内の名所をめぐる約9kmのコースを歩いた。 集められたお金はJVCのラオスプロジェクト, SHAREのキャンププロジェクトなど5つのプロジェクトに寄付される。		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 神奈川県から委託された「神奈川県内在住インドシナ難民実態調査」をまとめ, 報告書を県に提出した。 電話相談サービスや大和定住促進センターを通してボランティアの派遣依頼をしてきた定住者と, 新ボランティアの組み合わせを行った。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 「国際交流 ボスピタリティ トラスト」, 日本 少林寺拳法連盟	山口誠史, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている「さかさま農園」や山武ボランティア協会などと, 毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助(コレブを中心に) 88年の大雨期には例年以上の降雨が見られ, 干ばつは終わりをつげた。しかし, 雨量が多すぎ, 作柄は良くない。また食糧輸送もどこおりがちである。 ●総合的復興促進(マーシャ) 1. 植林, 土壌保全 7月中に山間部の土壌保全用の植林を終え, その後, 村人たちに苗木を配り各家庭に植えてもらっている。 2. 母子保健・栄養 家庭菜園, 離乳食等の訪問形式による指導が母親自身の手で行われつつある。 3. 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 犬養道 子・みどり一本 運動, 日本少林 寺拳法連盟, モ ラロジーMIRC, 東京グリーン・ ウォーク, 西本 願寺, ジャパン・ タイムス, チャ リティ・サイク ル, Tree for lifeの会	鈴木直喜, 山田 盛, 伊藤達男, 伊藤幸子, イエットベルク, ソロモン, バレタ, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	またもやソマリア通貨のシリングが切り下げられた。日本から活動資金を送金しているJVCにとって、この切り下げは一見得するようになる。しかし実際は全くそうではない。なぜなら外国からの援助や輸入に大きく依存しているソマリアでは、レート切り下げ直後に物価がはね上がるからだ。 ●農業による自立促進 マガネイ・キャンプ周辺の農場では、各農場間の差が年々大きくなり、順調なもの、荒れていくもの、再建中のものに分かれる。また、ハルバ・キャンプ周辺の各農場では、地元民ともめたりJVCとの話がこじれたりしているところもあるが、ひとつずつ難民自身が解決していかなければならない。 ●植林 JVCが直接農場を運営していない難民キャンプ2カ所にも約4000本の苗木を配った。 ●現金収入 水屋、かじ屋、パン屋、靴屋、焼物屋を継続。 ●コミュニティー・サービス 婦女子を対象にした農業教室の第2コースを始めた。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメッド・アブディ, シアッド, 荻ノ迫善六, 中野周二, 磯田厚子, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ, ムハボ, アブドラヒ, アブディナサル
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	農場建設は順調に進み、植林のための苗木作りも始めた。また、9家族がジャララクシ難民キャンプから農場の周囲に移った。今年中には40haの農場の全難民(=農民)40家族が移り住む予定。	R.I.-Japan 創価学会青年平和会議	シュクリ
カンブチア (ブノンペン) (カンダール県)	●サンタピエップ技術学校/ワークショップ 現在までに、3台のトラックのエンジン・オーバーホールを終えた。中程度や簡単なオーバーホールを合わせると、合計60台以上のトラックを修理したことになる。技術学校では9月から第2期の研修が始まり、孤児院からも2名の者が参加した。自動車労連より寄贈されたフォークリフトが到着した。 ●井戸掘り 農業省水利局の井戸掘チームは、9月12日から井戸を掘り始めた。ブノンペン市内ではあと2本掘り、12月以降の乾期にカンボット県に移動し、農村での飲み水を確保するため、井戸掘りを継続する。 ●RINE(ライン)プログラム【母子保健活動】 ライン・センターの建物は10月3日に落成した。落成式に合わせて、日本からJVCとSHAREの代表団が現地視察を行った。日本の病院より寄贈された光学顕微鏡が、保健省母子保健局に届けられた。	創価学会青年平和会議, モラロジ-MIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティ・ワークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロプチミスト千代田, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京地区青年会, 和平基金, 国際保健協力市民の会(SHARE), 仏教救援センター	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬清, 釘村千夜子 [カウンター・パート] (運輸省) タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソー (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④日本人主婦ボランティアとの連絡調整 ⑤季刊「ニューズレター」（英語、タイ語）の発行 9月29日～10月6日、カンブチアスタディーツアーにボンピモン・チャイブーン（ダイレクター）が同行し、ラインセンターの開所式に出席した。 10月21～22日、アランヤプラテートでジェネラルミーティングが行われ、タイのスタッフ11名が出席した。各チームの報告や今後の方針等が話し合われた。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、スンニー・テイチャリヤクン 熊沢ゆり
カオイダ （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 10月8日、第3期生（1988年度）の卒業式があり、173人が卒業した。17日からの生徒数は457人。 「8月末をもって定住インタビューを停止する」との発表の後もアメリカ、カナダ、フランス、オーストラリア、日本とインタビューは続き、9月に591人、10月は13日現在で143人がパナニコムへ移動していった。	UNHCR, SV (Stichting vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、 清水俊弘、大石道子
パナニコム （第三国定住待ち カンブチア難民）	●日本語学校 ●日本定住予定者へのプロジェクト ①日本語教育 ②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ●他国定住予定者へのプログラム 9月23日に勉強を始めたラオス難民27名はひらがなの学習を10月10日に終えて、11日より新しい（成績別の）クラスで文型の学習に入った。 また10月18日には2回目のカルチャー・オリエンテーション「おすしの日」を行い、日本のフィルムを見、ゲームをし、最後には皆でおすしを作って「いただきます」と食べた。好評。 10月28日には長い間出発を待たされていたカンブチア難民3家族がようやく日本へ出発。	天理教千葉 R.I-Japan	フォード順子、アナン・ブダミリンパティープ
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 子供会活動を再開した。ワット・ウタイタラム校で月3回行った。 ●クロントイ図書館 10月5日、コミュニティ委員会と合同でパヨム師を招き講演会を行い、2000人が集まった。 ●スラム生活改善プロジェクト ラチャタパンで住民に高速道路建設計画について説明し、同時に情報収集を行っている。 ●農村開発 ブリラム県M村で農業プログラムを行っている。	モラロジーMIRC, JOFIC, We Love Asia Tree for life の会 雄勝町町内寺院会 国際ソロプチミ スト駿河	パティイ・チャンスリヤ オン、サムルアイ・ジョ ンヨークラン、リーラ・ クンナロン、コメン・ス ンスマン 今泉 恵
ラオス （ヴィエンチャン）	●生活改善指導員養成プロジェクト 婦人を対象に母子保健、幼児教育、家政一般、農業等の一般知識修得並びに実習をラオス婦人連合保健省、教育省などの協力を得て行う。 生活改善指導員養成センターの建設は7月15日に着工した。完成予定は1989年春。 1988年11月にはセンターでの指導要項を作製するため、ヴィエンチャンに隣接する3県の農村で実情調査を行う。	庭野平和財団 難民と地球の緑 を考える会	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について — 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法 — 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (10月小計 39,067円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (10月小計 95,000円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (10月小計 2,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (10月小計 384,000円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (10月小計 68,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (10月小計 25,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (10月小計 5,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (10月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (10月小計 0円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (10月小計 56,385円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (10月小計 180,907円)

編集後記

▶何もかも失われたカンプチアで、保健副大臣の「援助はありがたい。が、人々の心の中に巣くう浪費への欲望が人間性をだめにし、人の世を墮落させる……」という言葉はずしりと重い。タイやシンガポールを経由してぜいたく品がなだれこみ、豊かな社会をあこがれる人々にくぎを刺したのかもしれないが、日本の私たちの生活を見すかされているような気がする。私たちは無意識のうちにカンプチアの人々より優位に立っていると思いがちだ。しかし実際はどうだろう。いつも何かに追いつかれ休暇がない。ものはあふれ何でも手に入るのに少しも豊かになった気がしないのだ。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497

(10月小計 445,869円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

昭和63年11月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎ 03 (834) 2388 FAX: 03 (835) 0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川県国際交流協会内 ☎ 045 (671) 7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。